

園長だより

あつい、あつい毎日、まさにうだるような暑さとは今年の夏ではないでしょうか、焼けつく暑さを表現する言葉に猛暑、極暑、大暑などがあります。先人たちも暑さと共に生活した証といえます。

東京でも40度を記録、体温をはるかに上回る気温に、体力を奪われ、思考する回線さえまひしてしまうものです。前回発刊から気が付けば1か月が経過し、「今月は・・・」と怠け心さえ出てきたことに園長らしからぬと自身で「かつ」をいれております。

思考するのはいつからなのか

もの心がついた頃には「あれ、これ」と考える事はあたりまえになっています。こんなエピソードを聞いたことがあります。お腹にいる胎児がいろいろ考えている。妊娠し徐々に大きくなるお腹、初産では大きくなるお腹に体幹を維持できなくなり、歩くのもままならない。そこで腹帯、サポートベルトを利用してみましょう。※昔のことですから今のような肌触りよくソフトな素材ではありません。

しばらく腹帯をつけていると、お腹のなかから硬いベルト部分をツンツンと蹴り上げるような感触がしました。

どうやらお腹の子はいつもの様子との違いを感じたに違いない。硬い部分だけを蹴る



とは、やわらかい人肌と既製で作られたもののかたさを感じているに違いないと胎児の段階からいろいろと考えて(思考)いるのだろう。そう考えるだけ我が子を愛おしく思えるのです。

母親ならではの感じ方、胎児の段階からいろいろと思考していることが伝わるエピソードです。



2歳児の思考 比べてみる

プールがはじまり私も一緒に入ることがあります。3歳児と入り終えた後のことです。プールの正面は2歳児りんご組の保育室、保育室前ではビニールプールを出して水遊びの真最中、私はプールからは出ずにしばらくひとりでプールに入っています。

そんな私に気づかないわけはありません。数人の子ども達に「なんで ひとりで入っている」「まだ、入っているのか」いつもの「なんで、なんで」の質問攻めにあいました。

たわいもない会話のやりとりが続き、拳句の果てには「プールにいるワニ」にされ、子ども達のファンタジーにつきあいました。

そんなやりとりの後、子ども達が持っていたカップやペットボトルにプールの水をわけてあげる、やりとりが始まりました。2歳でも発展的に遊びが進むのです。私も子どもたちの思考に合わせて、振り回されたり、「おみずやさん」から「ジュースやさん」へと



遊びは変化していきます。ペットボトル(大、小) マヨネーズの容器 ままごとのカップ、ペットボトルのふた、等々 水遊びで使用している容器をつぎつぎと持ってきます。

☺「ジュース ください」 ☺→子ども 「なんのジュースですか」

☺「みかんのジュースください」 ペットボトルを渡す 「わかりました。どのくらいですか」

※ どのくらいの間に 返しがあるのか?

☺「いっぱい ください」 ※ わかって いるのだから 量の概念はあるのかな 試してみよう 少し 入れて手渡す。

☺「たくさんじゃないよ すこしです」 ※ ペットボトルを再度、園長へ渡す。 ボトルの半分まで入れて子どもへ

☺「いっぱいじゃないですよ はんぶんだ」 ※こんな やりとりがつづき ボトルの口まで水を入れ渡す。

☺「いっぱいです みかんのジュースがいっぱいです」

驚いたことにペットボトル2本を比べ「たくさん、すくない」とは言っていません。頭の中の残像と比べているのです。ボトルの水量を目で見ても感じ、頭の中に記憶して比べていることがわかります。

科学的根拠はありませんが改めて思考



する力を獲得していることを実感しました。

子どもの思考に寄り添える大人の存在

「道草のすすめ」子どもの頃、道草をすることに子どもながらにわくわくしたものです。道草には発見と気づき、あらたな挑戦など成長のためのエキスをありました。昨今は社会情勢の変化や犯罪率の増加から子ども達の安全を最優先に考え、道草のすすめは影をひそめています。

保育園ではどうでしょうか、乳幼児期は初めて見る、聞く、触れる、初めての体験が毎日あります。寄り添う大人が心にゆとりを持ち接してあげていれば園内でも「道草効果」は、みられます。

子ども達の起こす行動、行為、関心を寄せた事柄に大人が目を向け、感じ取ることで発見や気づきは具体化してきます。

思考については体験を通じて様々な思考が生まれてきます。直感的なもの、身体的なもの、知覚的なもの、頭の中では年齢なりに事柄を整理して考えることが徐々にできてきます。

保育園での生活体験を通じて考えるが機会、場面が増えてきます。

そばにいる大人が子どもの思い、考えに気づき、理解してあげることが思考力の獲得の一助になることは確かなことです。

(園長 廣部 信隆 21)